

おもいやりの心

— 禅仏教の展望と真の教育 —

黒田 武志

成寿山 善光寺（曹洞宗）住職
横浜善光寺留学僧育英会理事長

1. 真の教育と智慧と知識

いま世界は疲れています。原因となる徴候は、様々な現象としてもたらされ、数えあげればキリがありません。また人間と自然界の間にも理解しがたい現象や恐怖、対処のしようもない出

来事など想像だにしない複雑な苦悩の中にあります。「一体どうすれば」この苦悩と恐怖から逃げられるのか、社会生活の規範である道徳で救い得ないとするなら、「宗教」に求められる役割と責任は重大です。地球は、国は、社会は、個人は、荒廃と疲労を遺し、いつ癒され、本来の

姿に戻れるのか、大きな課題です。本会のテーマは、実にその危機感と如何にすれば解決できるのか、仏陀の教える尊い真理に心を致し、今何か行動を起こす時だということを示唆しているように思います。宗教としての仏教、その一翼を担う仏教こそに究極の心理を求め、苦悩の本質を知って、その消滅と苦悩からの解放を理性的に体現させる必要性を今ほど感じる時はありません。しかし如何せん仏教を伝えるということとは、安易ではありません。伝える者の素養として、事物の無常、皆苦、無我という理を実践体系的にもつ必要があります。

さて真の教育とは何でしょうか？ これにひとことで答えることは至難です。この問いに禅仏教の伝統にのっとって考えるならば、三つのキーワード、即ち、智慧、不断の実践、正しい生活、という言葉が浮かび上がってきます。「仏教」は、文字通り私たち衆生が「仏になるため

の教え」でもあります。ではどうすれば仏になれるのか、その智慧とは、その洞察力とは、事物の本質に迫るとは、などに求めて私の信念とする仏教を述べてみたいと思います。

多くの大学ではさまざまな分野の知識をカバーした教育プログラムを提供していますが、真の教育というものはデータやある種の技能の取得だけに關するものではありません。学歴や職歴を發展させ、また、我々が直面する世界的な問題と取り組もうとする若い人たちにとって知識というものは、殊に21世紀の情報化時代、大切なものです。が、それだけでは充分ではありません。教育は、生活面での現実的満足という個人的レベルのものであれ、その時代の大きな問題を解決するという広いレベルのものであれ、その時代の大きな問題を解決するという広いレベルのものであれ、ただ知識だけのものであつてはならず、洞察力に富んだ智慧と解け合つた

ものでなければなりません。ここにおいて仏教的取り組みは、教育に対して貢献することができただけではなく、21世紀の繁栄を目指す時になくてはならないものなのです。

大乘仏教の伝統を伝える私たちの理想とする「菩薩」とは、智慧と思いやりの性格を備えたお方であるとよく言われます。ここで智慧（サンスクリットで Prajna プラジュニヤ）というのは単なる知識ではなく、自己と世界の性質についての深い洞察のことです。知識はデータとして受け渡しができ、情報として記憶に残せるものですが、智慧はもつと深いものです。智慧は、深い理解や賢明な決断をするために心を如何に使うか、その洞察力を与えるものです。

智慧は文殊菩薩にたとえられることがありません。禅仏教の通常の瞑想堂にはこの菩薩像が堂の中央部に安置されています。片手に剣を持つています。この剣は妄想と無知を切り払う能力

を表わします。貧困、飢餓、環境破壊といった世界規模の諸問題の多くも妄想と無知の結果である場合が多いようです。人は困苦の源たる妄想や無知を切り払うことによって自己を自由に、物事を明瞭に見ることができるようになります。この仏教的取り組みはキリスト教でいう「真理は汝を自由にする」というのと非常によく似ています。智慧を養い真理を体得することは、仏教的生き方の重要な様相です。先に言いましたように、大乘仏教では「智慧」と「思いやり」の二つを重要なものと位置付けます。「智慧」が鳥の翼の一翼なら、「思いやり」(サンスクリットで karuna カルナ)はもう一方の翼なのです。両翼がなければ鳥は飛べません。言い換えると、思いやりのない智慧は潤いがなく、消極的です。逆に、智慧を欠いた思いやりは誤った方向に行きかねません。

このように、教育は存在する全てに対し深く

思いやる心を養うことを重要とせねばなりません。昨今多くの教育機関の傾向である専門化や個人のキャリア志向、この是非はさておき、教育者にはなぜ教育に携わるのかという大きな心象図を先ず心を持つ必要があると思うのです。教育は、自分たちのためだけでなく遍く全体的なものへと「思いやり」を致せる心の育成、他の人や万物のためになるという生き方を果敢になしうる「智慧」の醸成が基本にあるべきであろうと考えます。

私たちが賢くあり、明確な決意ができ、妄想や無知でなく現実を踏まえることができるように、智慧をもって知識を補う必要があります。思いやりは、学習を通して世界全体のためになるように、専門化やキャリア志向という最近の教育傾向を補うために欠くことのできない大事な徳目です。

2. 道元禅師の「止むことなき実践」生涯にわたる教育

私は今日、日本の曹洞禅の伝統を代表する一人の僧侶として、ここで禅仏教の観点から教育について述べたいと思います。先ず、「禅とは何か？」を問う必要があります。本来「禅」は中国語の“Chan”からきたもので、これは沈思黙考、瞑想を意味するサンスクリットの概念“Dhyana”を転訳したものです。日本の禅仏教は主として三大宗派に分かれています。即ち、「栄西」(一一四一—一一二五)が開基した臨済宗、「道元」(一一〇〇—一一二五三)を開祖とする曹洞宗、中国僧「隠元」(一五九二—一六七三)が開いた黄檗宗からなります。禅宗の真髄は次の言葉で要約することができます。「心の中を見よ、そうすれば仏教が会得されよう。」このように禅宗はこの会得につながる瞑想に重きを置いています。いわゆる禅とは我々の心が何かにこだわって

る、とらわれている、そのこだわりやとらわれから心を自由に解放してやることなのです。私が属している曹洞宗は道元禪師が七六〇年前に開いたものです。今日この宗派の寺院は全国におよそ一五、〇〇〇あり、最大の檀信徒を擁しております。「道元」から第四代目「瑩山禪師」が普及に努められ、以後曹洞宗には釈迦牟尼仏の教えを正しく伝えた「二人の開祖」として尊ばれているわけです。

さて、宗派の開祖「道元」の最高傑作といわれる代表的なものは「正法眼蔵」です。仏陀が体現された事物の真の本質を如何に悟り、苦悩からの解放を実践的な方法で説いています。これは九五巻と語録一〇巻からなり、宗門の根本著作となっています。原文は非常に難解とされていますが、一節に「仏陀の道を学ぶことは、自己を知ることである。自己を知るということは、自己を忘れることである。自己を忘れると

いうことは幾千万の事物による確認を得ることである。幾千万による確認を得ることは自己と他者の身心から離脱することである」とあり、「正法眼蔵」に説かれる教えは「智慧と思いやり」というものを簡潔に表しています。

仏教を学ぶには先ず何よりも自己を知ること、即ち、己はいつたい何者なのかを探求することであり、人は自分を探求するにつれ自分を「忘れ」るようになる。現代に生きる自分は欲望を満足させることが価値だと思い込んでいる、だから、自分へのとらわれから離れないでいる。自分の欲望にとらわれては、自己から抜け出すことはできない。大事なことは「自分を忘れる」ことだと教えている。自分の独自性と純粋性を得ようとこれまで蓄積してきた自分の知識、経験、差別心がなくなるにまかせるといふようになります。自己という牢獄から開放されると人は自然界、地球、全宇宙（幾千万の事物）とこの瞬間

に一体となります。この真理の只中に生きるということは自由になることであり、他人の自由とともに（身心から離脱した）純粹生活の自由を経験することになります。これが眞の智慧です。

「自己を忘れる」という考えは現今の若い人々には非常に縁遠いものかもしれませんが、なぜなら、現代世界の多くの人々にとって人生は欲望に満ちていて、自己中心の利得が人々を駆り立てる唯一のものであるからです。けれども、そのような自己中心のライフスタイルは憎悪、競争、衝突、貧困、飢え、自然破壊、そして恐らくは究極的な人類の没落といったことにつながっています。

我々は、「自分、或いは自分自身、そして自分」というものに固く縛られているように思えますが、実際には他人の迷惑や外部の規模というものに動かされています。これこそは、道元の「自

己を知る」ということなのです。重要なのは、自己をまさに宇宙の一部であるかのような状態において宇宙を自然に顕現させることです。

道元にとって自己発見はただ禅の瞑想実践を通してのみ得られるというものであり、この瞑想や「只管打坐（ひたすらに坐る）」は、目的やゴールを求めて行ずるものではなく、ことごとく目的のない瞑想、自己利益を伴わない無条件の瞑想だということです。従って瞑想が啓蒙のためですらないという考えにつながってきます。この絶対的な立場こそ「究極の静謐の心境」と禅の伝統において呼ばれているものなのです。道元はこのところを、「身心脱落」といい、「身心」は人間を形成している一切を意味し、精神の存在とその卓越性が極めて明らかにされており、言い換えれば「悟り」とは、ある精神的な力を手に入れることを示しているように思う。

例えば、この「究極の静謐の心境」は最も単

純な行為に現れます。実際に手が汚れていようといまいと習慣的に手を洗うとか、また他人と挨拶を交わすとき敬意のしるしとして両手を合わせる、といったことはすべてそのような心の表現なのです。両掌を合わせるといふ行為は、日本では何かを祈念したい時、あるいは神社仏閣等を訪れ、うやうやしく手を合わせる。この手を合わせるという単純な習慣は実は素晴らしいことなのです。天と神仏と私が一体になる心のかたちを現しているものなのです。しかしながら今日若い人の間では、こんな習慣が次第に見られなくなりました。淋しいことです。

この「究極的静謐の心」と「禅瞑想の実践」は道元の教える仏法と人間の問題であり重要な二本柱です。道元が意図した無条件の形で瞑想を実践するなら、その形自体が仏陀の姿です。そこには豊かな智慧と全ての事物の本質に対する明哲な洞察力をもつこととなります。瞑想の

精神を持続的に実践するという性質が大切なのです。ものを食べるときは、ただ食べればよいのです。食べ物の栄養とか健康上の価値とか味を考えるのではなく、ただ「食べる」のです。飲むときも、それがお茶であればそのお茶の味のみよしあしとか、飲む行為が心を癒したり何かのためになるかといった余分なことを付け加えずに、ただその瞬間に没入して「飲む」ことに専心すべきなのです。これが「いまここ」ということなのです。

道元が中国で修行中でのこと、非常に暑い日でした。彼はある寺を訪ねた時、堂を連ねた中庭に一人の老僧侶が椎茸を干しています。灼熱のもと汗にまみれ、熱い石台に椎茸を一個一個取り出して丁寧と並べています。彼は寺の料理長（典座）。道元は見るがまま「貴方のような尊いお方がどうしてこんなきつい仕事を若い僧にさせないのでか」と問う。老僧は笑みを浮か

べながら答えました。「他人のする仕事は私のする仕事にはなりません」。道元はなおも「でもご自分の健康を考えれば、この炎天下はあまりにもきびしいと思います」。これに対し老僧は「瞬間は今ここにしかありません」という。道元はあまりの一語にショックを受け、愕然としました。青年僧だった道元にとっては思いもかけない痛棒だったでしょう。このことは言い換えれば、過去は決して取り戻せない。現実の確かなことは「いまここ」にしかないという教えなのです。老僧が自分の健康のことや暑さのことなど全く無関心に、ひたすらあるがままの「いまの瞬間」に心を尽くしていることを道元は実感しました。老僧の実践は実に禅の瞑想実践と少しも違いがないことを理解するに至りました。いまここにひたむきに生きるという実践は誰もが日々の生活を人間らしく生き抜くことのできる智慧なのです。「究極の静謐の心」とは自然に

あるがまま自由に生き、障害物もなく諸々の欲望に負けることもなく、また卑下することもない、思いやりの心をもって、誰に対しても優しい言葉で話しかけ、他人のためになることをよるこび、感謝しつつ唯頻々と奉仕の念に満たされるという在り方なのです。

私たちが今日痛切に必要としているのは、「智慧と思いやり」の心であり、生活上の一体化なのです。この実践は継続的になされる「仏教心による不断の実践」（日本語で「行事」）であり、この意味するところは日々の生活が瞑想であるということなのです。また、私たちの目の前にある世界は、それがなんであれ、私たちが仏教の実践に身をゆだねることのできる修行の寺院である、ということなのです。言い換えると、真の教育はただ大学の教室での形式的な教育だけでなく、また、大学在学中の年月に限られたものでもなく、「止むことがない」ということなのです。

す。年齢を問わず、どこに居ようと（家庭・職場等々）仏教徒の生活は仏道実践の場なのです。

3. 正しい生活

道元が海路中国に渡ったのは一二三三年。港に着いてもなおしばらく停泊する船に留まって語学の習得に取り組みます。そんなころひとり老僧が舟に椎茸を買いにやってきます。道元にとっては、はじめて見る彼の国の僧侶です。自室に請じてお茶をふるまう。道元は、僧院には料理する他の僧侶もいるはずだと考え、しばらくゆっくりしてゆくように頼みます。ところが彼は名刹 Ayuwang 山（愛育王山）の料理長だったのです。椎茸を買うため一日がかりの距離を徒歩でやってきた。しかし、老僧は道元の頼みを拒むのです。あなたのような尊い老師が、瞑想や公案研究に打ち込まず、なぜ未だ料理な

どしているのかを尋ねる、料理長は云う。「外国の人よ、未だ弁道を解せず、未だ文字を知り得ず」と。きつく窘む。道元は自分の未熟さに確と気づき反省する。しかし、更に問う「如何があらんかこれ文字、如何があらんかこれ弁道」。しかし老典座は応えず、解けねばわが寺へ来い、と立ち去ったのです。

この経験は、道元の記憶に生々しく残り、のち（一二三七年）完成した彼の「典座教訓」（料理人向け指導書）に記録されています。このマニュアルは、僧院料理人が他の修道僧たちに食事を与える正しい方法について道元が記したものです。同時に料理を通して他人の肉体の栄養補給のみならず精神の安寧のためにも責任を持つ料理長に要求される態度にも言及されています。「典座教訓」によれば、手に入る材料がどのようなものであれ、可能な限り最善の食事を作ることが料理人の務めとあります。今日この

洞察が「日本の食文化の原点」になっています。茶道も然りです。

仏教の精神性には、意識の実践において見出された「洞察と思いやり」の質を以って世界と係わりあう能力と瞑想の内的規律とが共に含まれます。故に「禅の料理人」になるために学ぶことは、自分の性癖から自分が生きている社会環境に至るまでのあらゆるものを含めて人生に存在する「材料」に光を投げかけることを意味します。「材料」に対するこの注意関心は、人生自体の糧を提供するために、即ち、世界と精神的に係わりあうために、これらの素材や原材料を巧みに使うことができるようになった出発点なのです。

自己を発見する課程において、世界との係わりあいは、キリスト教における職業あるいは天職の考えに相当するもの、即ち、仏教でいう「正しい生活」の概念で理解されるものにつながり

ます。正しい生活というのは、世の中で正しく身を処する在り方として、いかにして暮らしていくかという点に関し仏陀が示した伝統的仏教の八重の道、第五番目の輻やうなのです。仏教の実践は、全体として仏教の教義によって導かれる仕事や生涯職として、自己の経済的な生計に反映するための信仰治療者を必要とします。生涯職での成功とか金儲けが唯一最大の目的であるような教育モデルではなく、仏教徒としての教育への取り組み態度は、この精神、道徳的領域を包摂するものでなければなりません。

伝統的に仏教経典においては、正しい生活というものは、仏教の第一義を犯すという理由から生命を奪うことを認めていない。したがって仏教の道は究極的には苦悩の軽減にかかわるものであることから、積極的には、あらゆる存在物の生命を良くすることに役立つ生涯職を選ぶべきことを意味します。仏教は限りなく「生活

の全て」、人間としての生き方即ち処世術として考慮すべきものと心得ます。この道は努力すべきある種の抽象的な理想というよりは、むしろ人が持つて生まれた素材を「調理」することから生まれてくる人の道なのです。生得天賦の才能が何であれ、それを自分とこの世との係わり合いにおいて如何に正しく表現するかということです。即ちこれが仏教への説得力なのです。

このように真の教育というものは仏教界のあらゆる区分を越え、また他の諸宗教伝統の間を突き抜けて伸びる道であります。それは智慧や思いやりと融け合い、自己の真の性質やこの世の苦悩の軽減のために捧げられる全体的な学問観なのです。真の世界平和を実現し、地球と調和し、希望の光を未来に輝かせるもの、それは「仏教に根ざした真の教育」というこの精神なのです。

この論文は、黒田老師が二〇〇四年九月、アメリカ・ハーバード大学で行う予定だった講演会の予定稿です。従って、いま少し手を入れ、熟慮して、完成されたかたのものではないかと思えます。原稿用紙に走り書きのままを載せています。病気が六月に見つかったため結局これが遺稿となり、講演は叶いませんでした。

中興二世 大圓武志大和尚の足跡

■略 歴

- 一九三八年 栃木県大田原市に生まれる
一九六〇年 駒沢大学卒業
一九六二年 駒沢大学大学院修士課程修了
一九六二年 大本山総持寺特別僧堂に安居
一九六五年 タイ・ワットパクナムで修行
一九六八年 北米曹洞宗開教師任命
一九六九年 長光寺住職任命
一九七〇年 長光寺より善光寺へ寺号変更
一九八二年 「釈迦殿」を建立
一九八五年 善光寺留学僧育英会を設立
一九九八年 スリランカのサラナンダ財団より
国際栄誉賞を授与される
一九九九年 「横浜やすらぎの郷霊園」開園
二〇〇一年 駒澤大学より仏教興隆の功績を認め
られ曹洞宗特別奨励賞を授与さる

■講 演

- 二〇〇一年 京都清水寺に瑩山禪師顯彰碑建立
二〇〇一年 曹洞宗大教師補任
二〇〇二年 大本山永平寺道元禪師七五〇回大
遠忌焼香師として拝登
二〇〇四年 十二月二十九日 遷化 世壽六十
七歳
- 一九九七年 日本テレビ「心柔らかに今を生き
る」
一九九八年 NHKラジオ「心の時代」
二〇〇一年 日本能率協会「人材育成と私の使
命」
二〇〇二年 ドイツの禅協会、直心会、大悲山普
門寺におけるシンポジウムにて講
演、解説・ニードアルタイヒ修
道院を訪問し、聖体拝受の儀式に
参列、そして、同修道院院長と異
教徒間の対話について話し合った

二〇〇二年 タイ バンコクの世界仏教徒連盟

(WFB)にて講演(世界仏教徒青年連盟の招請による)演題「坐禅の姿がそのまま仏」

二〇〇三年 日本スリランカ国交樹立五〇周年

記念 友好親善使節団団長としてスリランカを訪問した際(スリランカ教育文化大臣よりの招聘による)世界平和祈願コロンボ大会に出席し基調講演を行う。演題「ダルマ・パーラの贈り物」

■評論・小論

一九九一―二〇〇二年 横浜善光寺留学僧育英

会研究論文集刊行

一九八三―二〇〇二年 善光寺季刊誌「成寿」

刊行

一九九二年 「心やわらかに」 佼成出版

一九九四年 「正法は海を越えて」

二〇〇二年 共著「道元の二十一世紀」東京書籍

「道元思想から見た現代社会へのアプローチ」